

## 基調講演 ①

## 幼児期・学齢期の自閉症児に対する支援の基本

京都市児童福祉センター副院長 門 眞 一 郎

みなさんこんにちは。京都市児童福祉センターの児童精神科医、門と申します。今日は、幼児期・学齢期の自閉症児に対する支援の基本という題をいただいておりますが、自閉症の支援のもっとも中心的な部分というのは、コミュニケーションの支援なのです。自閉症の人と何らかの形でかかわる、何らかの形で接するときには、必ずコミュニケーションというものが必要となるわけで、関わりがうまくいかない、いろんな困ったことが起き

る、そういう時というのは、たいてい、コミュニケーションがうまくいっていないから、なのです。ですから、コミュニケーションの支援ということが基本になると思います。

ここで、自閉症スペクトラムについてちょっとおさらいをしておきます。自閉症スペクトラムというのは、生まれつき脳の「機能のタイプ」が一般の人とは違う状態です。脳の「機能障害」とよく言われたり書かれたりしますが、いきなり機能障害というのではなくて、脳の機能のタイプが違う。バリエーションなのです。脳の機能のタイプの違いで最も皆さんにピンとくるのは、利き手の問題だと思います。左利き右利き、これも脳の機能のタイプが違うということなのです。しかし、左利きの人が劣っているわけではない。でも、左利きの人はいいたい10パーセントと言われていまして、圧倒的に少数派なんです。ですから社会が、右利きの人を中心にして進んできているので、場合によっては左利きの人是非常に不便を感じるようになりますし、そのために自分の持てる能力を発揮できないとか、あるいは仕事がうまくこなせないということになれば、それは障害レベルと言っていいかもしれません。でも左利き自体は、決して障害ではないわけですね。今、ふと思ったんですけど、最近駅に自動改札の機械が普及してきましたね。あれはたいてい右側に切符を入れるようになっています。たいていとかほぼ全部です。左利き用のは見たことないです。という風に、基本的に右利きを想定していろいろなものが作られてきているのが現実です。

脳の機能のタイプが違うということは、脳の情報処理の仕方が一般の人とは違うということで、物事の感じ方とか考え方、理解の仕方が一般の人とは違うわけです。違うこと自体は、決して優劣の問題ではないのです。劣っていると未熟であるとかいう問題ではないです。それから、知的発達とは自閉症スペクトラムとは別次元の話なので、知的発達レベルは様々です。最



重度の知的障害レベルの人から優秀知能の人までいろんな人がいるわけです。そしてこれは、わたしの最近の言い方ですけども、発達に著しくメリハリがある状態と考えます。発達に凸凹があるとか、アンバランスさがあるとか、偏ってるとかいう表現がいろんな人たちによってされますけど、どれもですね、やはりネガティブな印象を完全には払しょくできていないですね。ですから、とてもメリハリがあると言いたい。ありすぎると日常生活に支障をきたすことも出てくる。そうなるとう障害レベルということになると思いますが、メリハリ自体は決して障害ではない。そこで、自閉症スペクトラムの人を支援をする時の基本方針は、ハリをしっかりと伸ばして自信を持ってもらうということですね。メリのところを一所懸命鍛えよとか、あるいはメリで勝負させようというのは、非常に危険というか、自信を無くすことに繋がりやすいです。頑張っても頑張っても努力はするんだけど、なかなかメリは解消しないのです。そうすると、やってもやってもだめ、自分はそれほどだめな人間なのかという風に思ってしまう人もいます。ですからメリで勝負しない。ハリで勝負するということです。

そのためには一人一人のメリハリがどういう状態かということを理解しないとイケない。それを理解したうえで、どういう支援ができるのか、どういう支援をすべきか、ということを考えなければいけないわけです。ところで、自閉症スペクトラムの人の最大のメリハリは、音声言語だけでは理解しにくいというメリと一方で視覚の手がかりがあれば理解しやすいというハリです。このメリハリがすごくあるわけです。しかし、視覚的に理解する力が強いということがハリではあるのですが、それが裏目に出ることもあるんです。不適切な視覚刺激に惑わされてしまうということなんです。ですから視覚的な手掛かりをとにかくやたら用意すればいいということではなくて、適切なものを提供しないとイケないのです。

このスライドは、私が通っている眼科の待合室に貼ってあるのポスターの上半分なのです。こういうイラストが描いてあります。80パーセント。下半分に説明文が書いてあります。「情報の約80パーセントは目から入ります」ということなのです。これは一般の人の話です。この眼科は自閉症スペクトラムの人の得意とする眼科というわけではなくて、ごく普通の眼科です。このポスター自体、日本眼科啓発会議というところが作っているポスターで、日本眼科啓発会議のホームページを開けばこれを含めていろんなポスターを見ることができます。つまり一般の人でも、目が見える限りは、約80パーセントの情報となるととっているということなんです。ですから「百聞は一見に如かず」ということわざもあるわけです。

ところで、自閉症スペクトラムの人はどうでしょうか。80パーセントではすまないのではないかと思います。一般の人は、目から80パーセントで耳から10数パーセントとなると、耳から入ってくる情報を理解する力が弱い自閉症スペクトラムの人は、相対的に視覚的な情報に頼る比率が高くなるはずなんです。ですから80パーセントではすまないでしょう。ひょっとしたら90パーセントかもしれないです。場合によっては99パーセントかもしれない。それくらい視覚的な手掛かりに頼っているでしょうから、視覚的な手掛かりのことを考えることが重要だということなんです。念のために言っておきますけど、自閉症スペクトラムの人は99パーセントとか90パーセントとか視覚的な情報に頼っているということはデータとして出ているわけではないです。例えばこうかもしれないというふうに、私は言っているだけです。というのは、先日同スライドを出した後、「自閉症の人は99パーセント目からだ」と思い込んだ人

がいます。正確な数字はともかくとして、80パーセントよりは多いと思います。

ここから本題に入らなすけども、コミュニケーションの支援が自閉症スペクトラムの支援の中では最も重要、最も中心的な部分になります。コミュニケーションの支援をする場合も、当然ハリを生かすこと大切です。メリではなくてハリを生かして支援する。ということは視覚的な支援ということになります。コミュニケーションの視覚的な支援。ところで、コミュニケーションは、二つの方向がある行為なんです。こちらから、自閉症スペクトラムの人に伝えるという面と、自閉症スペクトラムの人からこちらに伝えるという、両方の方向がある行為なんです。ですから、両方を支援しないと、コミュニケーションを支援したことになるのではありません。こちらから自閉症スペクトラムの人に伝えることを支援するというのは、自閉症スペクトラムの人からみれば、理解のコミュニケーションということになるんですけど、その支援の具体的な方法として、現在もっとも有効有力なのは、視覚的構造化というやり方です。それからもうひとつ、自閉症スペクトラムの人のハリがあります。ルーティンに強いということなんです。決まったやり方、決まった手順、決まった流れ、こういうものをいったん習得すると、非常に正確に律儀に実行する人が多いのです。ですから、ルーティンを使って構造化するというのも、コミュニケーションの支援としては、大事な方法です。それから、逆方向ですね、自閉症スペクトラムの人からこちらに伝えてもらう。つまり、自閉症スペクトラムの人からすれば、表現コミュニケーションあるいは、表出コミュニケーションということになります。その支援を視覚的に行うには、どうするかというと、代替拡大コミュニケーションという方法がもっとも有力有効です。略して頭文字をとってAACと呼ばれることも多いですけども、代替拡大コミュニケーションというのは、言葉でコミュニケーションをとれない、あるいは、言葉でうまくコミュニケーションをとれない場合に、言葉以外の方法を言葉に代えて用いる。代替というのはそういうことです。言葉に代えて、言葉以外の方法をつかう。それから、言葉では十分にコミュニケーションがとれないので、言葉を補強するという意味で、別の手段と一緒に使う。それが拡大という意味ですね。ですから、どちらの方向も言葉以外の手段を使ってコミュニケーションを支援するということになります。ところで、代替拡大コミュニケーションには、昔からいろいろな方法があります。みなさん一番よくご存じなのは、聴覚障害の人が使う手話です。これは、代替拡大コミュニケーションの代表例だと思います。自閉症スペクトラムの人の場合には、手話が一時使われたこともありますが、あまりいい結果を生まないのです。確かに手話も視覚的なので、言葉よりは習得しやすいんですけども、手話の最大の欠点は、手話に上達すればするほど、理解してくれる人が反比例的に減っていくということです。つまり、手話をたくさん覚えれば覚えるほど、それを理解してくれる人は減っていくので、コミュニケーションとしては、あまり拡大しない。むしろいいのは、絵や写真や文字を使ったコミュニケーションです。

今日はその中でも、絵や写真や文字をカード状にして、それを使って自閉症スペクトラムの人からコミュニケーションをとれるようにする、そういう代替拡大コミュニケーションについて、少し詳しくこのあとお話したいと思います。それは、PECSという方法なのです。それで、今日は時間の関係でまず表出のコミュニケーション支援、特にその中でもPECSのお話をしたいと思うのですが、理解コミュニケーションについてもちょっと触れておきたいと思いま

す。理解コミュニケーションの支援では、視覚的構造化とルーティンによる構造化が重要です。「構造化」という言葉は、自閉症支援の世界では、最近によく聞く言葉だと思いますし、皆さんもそれなりに理解はしておられると思いますが、私が考えている構造化というのは、どういうものかということ、少しお話したいと思います。「構造化」ということばの三文字の漢字を見ると、構造がないところに構造を造るような印象を受けるのですが、構造がないところというのは、ふつうはあり得ないのです。この場合の構造というのは、ある場面の「意味」と「見通し」なのです。意味と見通しというのは、どんな場面にもあるのです。必ずあるとあっていいです。例外的に、意味と見通しがない状況というのがあるのですが、それはどういう状況かという、例えば、あの震災直後の津波に襲われた陸前高田市のような状況です。市全体ががれきで埋まってしまって、どこが何やらわからない状況です。つまり、その場面の意味が皆目わからない。それから、これがどういう風に復興していくのか、その時点では見通しが、全く立たないです。ですから、意味と見通しがない場面というのは、例外的にはありますが、ふつうは、必ずあるのです。今のこの場面でも当然、意味と見通しがちゃんとみなさんに伝わっている、ここに集まっていちゃっているわけですから、意味は、ここでどんなことが行われるかという内容ですし、見通しは、スケジュールです。最終的に何時に終わるか、ひとつひとつの講演とか、活動が何時に終わるか、それから、今日の行事全体が何時に終わるかという見通しは、非常に大事なことです。これが、よくわからない状態だと、参加をためらうことにもなりかねないです。実際にこの場にいる人は、何時に終わるかわからないとイライラするかもしれません。例えば、私の話は3時までですけど、開始が1時半というだけで、3時までというのが伝わってないと、3時、4時とずっと話し続けていたら、みなさんだんだんイライラしてくるでしょう。いったいいつまでしゃべるんだと。ですから、終わり、見通しというのは非常に大事です。しかし一般の人には、わかっている見通しと意味が、自閉症スペクトラムの人には、よくわからないということがよくあります。それから、意味と見通しという構造は、可能性としては1つとは限らないんです。いくつか可能性がある場合があっても、適切な可能性は1つなんです。ですから、一般の人が思っている意味と見通しとは違う意味と見通しとして自閉症スペクトラムの人が理解していると、そこでコミュニケーションのずれが生じるわけです。ですから、構造化というのは、構造がないところに構造を造るのではなくて、構造を明確にするということなんです。明確に伝えるということなんです。ですから、こちらから伝えるコミュニケーションなんです。

構造を明確にするためには、自閉症スペクトラムの人は、メリではなくて、ハリで伝えてもらう方が理解しやすいわけですから、視覚的に構造を明確にするということが、理にかなった方法ということになります。それから、ルーティンを使った構造。決まった流れにしておけば、これからどんなことをするのかとか、いつまでやるのかという風な意味や見通しがすぐにわかるわけです。ここで、よく出る質問にあらかじめ答えておきたいのですが、ルーティンを使って構造化するとしても、つまり、決まった流れにして、活動するとしても、いつも同じ流れになるとは限らない、予定を変えなければいけないことが起きてくる。そういう時に、自閉症スペクトラムの人は、なかなかそれを受け入れてくれない。変更を受け入れてくれない。変化に抵抗するということが昔から言われていますけれども、これは、必ずしもそうではないだ

ろうと、私は思っています。変更を伝えるときの伝え方が問題で、変更というのはたいてい、口頭で伝えられることが多いんです。特に、急に変更になるときは、まず口頭で伝えることだけになってしまうんです。そうすると、自閉症スペクトラムの人は、いったん理解している構造に関して、言葉だけで変更を伝えられると、それは、メリで伝えられるわけですから、理解できない。当然これまで理解しているやり方でやろうとするわけです。ですから、支援する側からすれば、変化に抵抗する、変更を受け入れないという風に見えるのですが、それは、支援する人の伝え方が悪いからなんです。ちゃんと、変更も視覚的に伝えれば、理解してくれることがずいぶん多いのです。

今からいくつか視覚的構造化の例をお示しますが、自閉症スペクトラムの人に使ったものだけではなくて、一般社会で使われている視覚的構造化の例も紹介したいと思います。つまり、一般の人も80パーセントの情報は、目からとっているのです。やはり、世の中には、視覚的構造化はたくさん行われているのです。しかも、年々増えています。これは確実に増えています。しかし、視覚的構造化というのは、やればいいというものではないのです。明確に意味と見通しが伝わらなければ意味がないのです。別の可能性が伝わってしまったら意味がない。そこで、構造化の目的と手段をしっかり押さえておかないといけません。それを取り違えてはいけませんということです。構造化の目的は、構造を、つまり場面の意味と見通しを明確に伝えて明確に理解してもらうことです。構造化の手段は、感覚で分類すれば聴覚的構造化があります。言葉で伝えるとか、あるいは、キッチンタイマーのような音で伝えるとか、パチンコ屋の「蛍の光」の曲みたいな音楽で伝えるとか、そういう聴覚的構造化もあれば、視覚的構造化もあるという風に、手段はいろいろ分けることができます。それから、ルーティンを使った構造化というふうですね。しかし、手段を目的と取り違えてしまうと、例えば、やたらいろんな標識を作るとか、いろんな写真をカードにして見せるとか、そういうことをやってしまうのですが、本人にそれが理解できなかつたら、意味がないわけで、目的はやはり、理解してもらうことです。その目的に合った手段を考えないといけません。とりあえず作った手段がうまくいかないからといって、手段そのものを否定するというのは、あまりにも早計です。目的にかなうように手段を作り替える必要があります。ここからあとはお手元の資料にはないのです。これは、京都の市バスや地下鉄で、かつて優先席の窓に貼られていたものです。現在はこれとは違うのですが、こういう表示は、色々な公共交通機関で使われています。しかもたいてい三種類の視覚的構造化を組み合わせています。絵と文字と、それから座席の色が違っていたりして。三種類も視覚的構造化を組み合わせていますが、これで明確に伝わるかどうかですね、意味と見通しが。左から二つ目ですが、自閉症の子にとっては、ひょっとしたら、今僕は満腹だからこの席に座らなければいけないとか、「お父さん！お父さん！メタボの席はここですよ！」と言ったりすると、別の可能性に受け取ったわけです。意味と見通しをね。ですから、できるだけ間違いなく意味と見通しが伝わるように、イラストを工夫しなければいけないのですが、現在使われているのは、これなんですね。左から二つ目は、少しは明確になったかもしれないですね。しかし、一番右が加わっているんです、五番目が。これが明確に伝わるでしょうか。恋愛中の人がここに座るといふ風に受け取ると、構造がまた別の可能性にとられてしまったということになります。それと、交通標識は圧倒的に視覚的構造化のオンパレードです。ぱっと見

てぱっと理解してもらわないと事故につながるので、視覚的構造化の典型なんですけど、これも、作ればいいということではないのです。200メートル先に交差点がある、というのはすぐわかる。そしてその交差点で、大阪に行こうと思っている人はどうすればいいのか。右折するのか直進するのか。それを瞬時に間違いなく判断できるかということ、ちょっと怪しいのではないかと思うんです。でも、ルールを知っていれば、間違いなく伝わるんです。この矢印の右に書いてあるのは全部右折で、矢印よりもさらに向こうに書いてある域陽だけが直進なんです。そういうルールがわかっているならば、すぐに正しく理解できるのですが、この写真を撮ったとき私はルールを知らなかったの、これはどういうことだろうと思って写真を撮ったんです。最近もっとすごいものがありました。福井に行く人は、どうしたらいいんだろう。

重要なのは、構造化の中でも、見通しという構造を伝えることです。それを時間の構造化と呼ぶのですが、見通しが立つと不安とかイライラは軽くなりますし、変更とか待つこともできるようになりますし、自発的に次の行動も選択することができるようになります。時間の構造化というのは、要するにスケジュールを見てわかるようにするということです。口頭でその日の予定を伝えるのではなくて、見てわかるようにする。スケジュールは、これは私の分け方ですけれども、2種類に大きく分かれます。「活動間スケジュール」と「活動内スケジュール」です。活動間スケジュールというのは、午前中とか1日、どんな活動がどういう順番で行われるかというスケジュールです。活動内スケジュールっていうのは、1つの活動の中でどんなことをどういう順番でやっていくか、ということを示すスケジュールです。必要に応じてその2つを組み合わせるといいと思います。これは、1人1人に応じたものを作らないといけない。グループで1つとか、クラスに1つというスケジュールでは、基本的にダメなんです。1人1人の子どもの理解の仕方が違うので、その子が、間違いなく理解できるようなスケジュールにしないといけない。材料として何を使うか。実際に活動で使うものを並べて、それをスケジュールにするとか、絵カードや写真を作って、それを並べてスケジュールにするとか、あるいは文字で書いていくとかですね。それから、長さも1日全体がいいのか、あるいは1週間がいいのか、あるいは半日がいいのか、あるいは、次の活動1つだけがいいのかという風に、長さも1人1人に応じて考えないといけない。示し方も一覧式があっているのか、めくり式がいいのかということも考えないといけないのです。1人1人に応じて考えないといけない。それが個別化です。どの子にもおなじもので間に合わせるといえるのは、画一化なのですが、画一化はダメですね。個別化です。特別支援教育の理念をかかげた、2007年ですかね、局長通知がでましたが、その最初に、特別支援教育というのは、1人1人の教育的ニーズに応じて教育していく、必要な支援をしていくと書かれています。ですから、1人1人のニーズに応じるというのが、基本なんです。そこからスタート。

でも、ニーズという言葉が誤解しないでください。世の中では、ニーズという言葉を使いながら、ニーズではなくて単なるリクエストのことを言っていることが非常に多いのです。要望していることをそのままニーズという風にとらえていますけども。そうではないです。ニーズは、その子にとって必要なことです。必ずしも、要望していなくても、必要なことは別にあることが多いですね。例えばコミュニケーションの支援が、ある自閉症スペクトラムの子どものニーズとしてあっても、子ども自身がコミュニケーション支援をしてくれなんて言うこと

は、まずないわけです。大事なものはニーズのほうです。活動内スケジュールは、どんな活動がどんな順序でこれからあるかということで、例えば、写真でつくれば、このように、上から下に順番に並べていく。ひとつ済めばそれを外していくことによって、見通しが鮮明になるということです。変更するときには、言葉だけで変更を伝えてはだめです。必ず、スケジュールの中で、見てわかるように変更を伝えないといけない。これが、中止になって、これに代わりません。という風なことです。それから、活動内スケジュールですが、1つの活動の中で何をどんな手順でするのか、いつまでやるのか、という見通しも含めます。活動内スケジュール、これはTEACCHプログラムではワークシステムと呼んでいますけれども、ワークシステムという言葉が一般的にはわかりにくい言葉なので、私は、活動内スケジュールと呼べばいいのではないのかなと思っています。

このスライドは、活動内スケジュールの例ですが、これは小学校4年生か5年生のころの、非常に知的にも重い、最重度の知的障害の自閉症スペクトラムの子どもが、普通学級の子どもたちと一緒に社会見学に行くことになったのです。河原を1時間半歩いて、上流にあるゴミ処理場を見学するという行事なのですが、お母さんが来られて、うちの子どもはこんな河原を、1時間半もただ歩き続けて行くことには絶対耐えられない。絶対にすごいパニックを起こすに決まっているので、休ませようと思っています、という話だったんです。でも、この子は、障害レベルとしては、非常に重いんですが、保育所時代からお母さんが毎日スケジュールを作って生活してきている子なので、社会見学の活動内スケジュールを作ればいいじゃないですか、と言ったのです。そしたら、お母さんが、なんの変てつもない河原を1時間歩くというスケジュールはどうやって作ればいいんですか、という風にちょっと詰め寄せられた。河原を1時間半歩けば、橋の2~3本はあるでしょう、橋の写真を撮って、それを並べて活動内スケジュールにしたらどうでしょうか、と言ったんです。そしてお母さんが、写真を撮ってスケジュールを作られたんですが、なんと、橋が16本ありました。今9番目まで来たんです。次10番目はこの橋が見える。ひとつ橋に到達したら、写真に付箋を子どもに貼ってもらう。次10番目はこういう橋が見えるよということで、頑張って歩いていくわけです。そうしてパニックを起こすことなくゴミ処理場に到着して、帰りもちゃんと学校まで帰ってこれた。夕方、お母さんが学校にこの子を迎えに行ったんです。そしたら、一緒に行った普通学級の子どもが4~5人駆け寄ってきて、「おばちゃんありがとう、あれがあったから助かったよ」って言ってくれたそうです。誰にとっても、見通しというのは非常に大事で、時間の構造化がちゃんと視覚的に行われると、誰にとっても非常にわかりやすいし、落ち着けるし、いいんです。一般の子どもは、我慢してるんですね。かならずそのうち、目的地には到着するだろうと、我慢して歩いてるわけですよ。これも活動内スケジュールとっていいと思うんですが、脳波の検査をするときに、うちの診療所で子どもに説明するものですが、1・2・3・4・5・6というふうに進んでいきます。これを見たらわかるように、注射はありませんということも伝えられるわけですよ。痛いという場面はないです。でも、これだけではダメなんです。実際に使う時は、7番目がないと、5番6番あたりで、違う見通しとして受け取られる可能性があります。今日はここでお泊り、と思った瞬間に大パニックになるかもしれないので、使う時は7番目もいります。1番と同じ絵をもう1枚つくって、7にして終わりを示すとか、お母さんの写真を7に

するとかすれば、家に帰れることがわかります。

これは、このあとお話しするPECSというコミュニケーションのトレーニングで使われる方法なのですが、「待つ」ということを理解してもらう工夫です。待つということは非常に抽象的なので、理解しにくいんです。それから、「ちょっと待ってね」というのは、非常によく使うのですが、誤解を招きやすいのです。自閉症スペクトラムの子どもにとって、「ちょっと待って」ということを、こちらは5分のつもりで言っても、子どもは5秒のつもりで受け取るかもしれない。そうすると、5秒たったら、またやってくる。「ちょっと待ってね」とまた言う。また5秒してくる。ちょっと待ってねってさっきから言ってるでしょ！とだんだんいらついてくる。それは、伝え方が悪いわけです。ちゃんと見通しが立つようにしないとイケない。そのためには、PECSでは、短時間だと、この「待って」というプレートを渡して、これを渡されてる間、次の事に移れないということで、待つということを理解してもらうんです。もっと長い時間待ってもらう時には、こういう小さいチップのようなものをマジックテープで順々に貼っていくんですけども、5枚貼れるようになってますが、全部貼り終わったら待ち時間終了ということになるわけです。まあ教えるときは最初は1個だけで教えます。しばらく待ってもらったらこれを1つ貼って、はいよく待ってくれましたねと言って、次の活動に移ったりするわけです。それがわかれば、次は2つで教えていく。それがわかれば、今度はもっと長い時間、数を増やして、5つまで使えるということです。それを教えてるところをちょっとお見せします。PECSでは子どもが、自分のほしいものを要求してきたときに、ちょっと待ってと言って、このプレートを渡すんです。最初は1秒くらいで即回収して、よく待ったねと言って、子どもが要求したものを渡す。それを、繰り返していくうちにだんだん、時間を延ばしていくんですね。1秒から2秒、2秒から3秒という風に。別に、1秒刻みでやらなければいけないというわけではないですよ。その様子をちょっと、お見せします。子どもはアポロチョコくださいっていうのをカードで要求しているんです。それを受け取ったら、この「待つ」というプレートを渡して、ちょっと待ってねと言って。すぐに回収して、よく待ったねと言ってアポロチョコを渡す。このように待つということが視覚的に理解できるようにこのような小道具を使うわけです。言葉でちょっと待ってねというのは最も誤解を招くやり方です。時間というのは目に見えないので、なかなか正確に伝わりにくいですけども、これを見えるようにすれば理解は容易になるのです。

これはタイムタイマーと言って、赤い部分の面積がだんだん少なくなって行って、最後は赤い部分がなくなって、ピピッと音がするんです。これは、自閉症スペクトラムの子どもにとって非常に分かりやすい方法です。赤い部分がなくなるまで遊んでていいよとか、赤い部分がなくなったら遊びは終わって、片づけてねっていうのを伝えるときにも使えますし、どこかお出かけするときこの赤い部分がなくなったら出発しますよというふうに、待ってもらうときにも使えます。

視覚的な支援について、時々出る質問に、「いつやめるんですか、いつまでやるんですか」と、「どうやってやめていくんですか」というのがありますが、視覚的支援はやめません。視覚的支援は一生使います。支援者が支援することをだんだん減らして自分で支援する、自己支援に将来的には移っていく。ですからスケジュール管理もできるだけ自分で管理できるよう



にします。最初に今日1日のスケジュールを決めるところから始まって、そのスケジュール表を使って自分で行動していく、それが目標です。やめるのが目標ではないです。自分で使いこなせるようにするというのが目標です。そして手段はいろいろ変わっていくと思います。写真を並べるようなものから、最終的には皆さんが普段使っているようなスケジュール帳とか携帯とかスマホのスケジュール機能とか、そういうものに移っていくでしょうが、一生使います。やめるものではないです。皆さんが自分のことを考えたらわかると思います。いろんなものを皆さん使っているはずですよ。私もですね、実はタイムタイマーのスマホ版を、今講演中に使っているんです。赤い部分があと43分。横目でこれを睨みながら、話のスピードを調整しています。ちょっと時間が足りないです。トータル95枚のスライドで今33枚目なので、ちょっとまずいです。だから、3時終了は無理だと思うので、3時10分まで延長します。今私は見通しの変更を口頭で伝えました。今のところ、意識を失っている人はいないみたいなので、たぶん伝わったと思うのです。3時ではなくて3時10分。冗談ですよ。3時に終わるようにします。だけど自閉症スペクトラムの子どもに、そういうやり方はたいていうまくいかない。3時から3時10分に変りましたということ、分かりやすく視覚的に提示しないと伝わらないです。

以上で理解のコミュニケーション支援の話は終わって、表出のコミュニケーション支援の話にいけます。メリハリのハリを生かすとしたら、やはり視覚的な支援です。表出コミュニケーションの視覚的支援には、代替拡大コミュニケーションです。その中でも、絵や写真や文字をカードにして、それを使って伝える。しかも自分から伝える。自発的に伝える。つまり自分が伝えたいと思ったときに伝える、ということをお教えることができるのは、PECSだけなんです。いまのところ、ですからPECSが使えるようになると、自閉症スペクトラムの人の生活の質は格段に向上すると思います。そこで、ここからはPECSの紹介をしたいと思いますけど、ほんのさわりの紹介しかできません。PECSというのは絵カード交換式コミュニケーション・システムと日本語では呼ばれています。Picture Exchange Communication Systemの頭文字です。開発した人は応用行動分析のアンディ・ボンディと、日本でいう言語聴覚士のロリ・フロストです。PECSの対象になる人、PECSを使えば役に立つ人というのを、私なりに整理しました。まず音声言語でコミュニケーションが取れない人。言葉を全くしゃべれない、あるいはほとんどしゃべれない。しゃべれてもエコラリア（おうむ返し）ばかりという人には、PECSは最も役に立つと思います。それから、言葉でコミュニケーションは取れるが自発的にはコミュニケーションがほとんどできない。つまり聞かれたら答えられる。聞かれなかったら自分がどんなに伝えたいことがあってもなかなか伝えられない。ひたすら痲癢を起したりとかですね、なにか別の方法で、たいていは問題行動と言われるような行動で伝えるしかなくて、言葉で自発的に伝えることができない。そういう人にもPECSは役に立ちます。それから言葉で自発的にコミュニケーションは取れるけども、非常に限られてる、非常に少ないという人です。そういう人にも、もっとことばを拡大するためにPECSは役に立ちます。どれか一つでも当てはまれば、PECSは役に立ちます。年齢は問わないです。もちろん早くから使えるようになって、早くから自発的にコミュニケーションができるようになれば、それだけ生活の質は上がると思いますけれども、大人になってしまったからもうだめというこ

とはないです。何歳になってもPECSに取り組むことは可能ですし、むしろ大人になってから使うとPECSを習得するのは早いです。コミュニケーションということが基本的には分かっているので。ただそれがうまくできなかつたり、間違ったコミュニケーションになっていることが多いだけで、コミュニケーションそのものは、素地があるのでPECSを教えるとすぐ早く理解、習得できることが多いです。それから障害も問わないです。自閉症スペクトラムに限らないです。上の3つの条件のどれかが当てはまればどんな障害の人でも構わない。

PECSではコミュニケーションの働きを2つにまとめて、この2つを教えるんです。要求とコメント。要求は、どういう風に身についていくかということ、要求したものが手に入るからです。のどが渴いた時に水ちょうだいと言って水がもらえて、渴きが癒されたら、また喉が渴いた時にそれを伝えようという気になります。だから要求というのは、要求したものが手に入ることで身についていく。コメントというのは、例えば遠くにヘリコプターが飛んでいるのがかすかに見える、あるいは聞こえるというときに、「あ、ヘリコプターだ」と言う、それがコメントです。子どもが、「あ、ヘリコプターが飛んでる」とコメントしても、手に入るものはヘリコプターではないです。ヘリコプターのおもちゃでもない。手に入る、返ってくるのは「ほんとだ」と、同意してもらえるとか、「うわ、あんなちっちゃいのよく見えるね、すごい、いい目してるね君は」と褒めてもらえるとかです。そういう同意とか賞賛が返ってくるから、またコメントしようという気になるんです。ですが、自閉症スペクトラムの子どもは、特に年齢の低い場合は、同意とか賞賛というのはあまりインパクトがないのです。ピンとこない。だからコメントをどんどんしようという意欲が高まらないのです。でも要求は、自分の欲しいものが手に入るということは、しっかりインパクトがあるので、要求はどんどん身につけていく可能性があります。ですから要求から教えるほうが合理的です。これまでのコミュニケーションとか言葉の教え方の欠点は、要求よりコメントから始めるということです。コメントの練習からはいっていき。「これはなんですか」と言って答えてもらうとか。「これはコップですよ、コップと言ってごらん」というように模倣をしてもらうとかです。とにかくコメントから入るので、子どもにとっておもしろくないんです。あまり意欲が出ない。しかし要求から入れば意欲は高まるわけです。それからもう一つの欠点は、自発ではなく応答のコミュニケーションのトレーニングになっている。つまり、「これは何？」という風に、質問して応えてもらうとか、「これはコップですよ、コップと言ってごらん」というふうに模倣を促すとかです。こちらから働きかける、大人から働きかけて答えるという練習なんです。つまり応答なんです。応答ばかりトレーニングしているとプロンプト依存、要するに指示待ちになりかねないんです。自分から伝えるということができなくて、聞かれなければ答えられないという状態になってしまう。それはよくない。自立のためには非常によくない。要するに自発のコミュニケーションが大事です。それから教えていくときにはコメントよりも要求から教えていくほうが子どもの意欲は持続する。

PECSのトレーニングの中心的な部分は、これが全てではないですが、中心的な部分は6つのフェイズ、6つの段階に分かれています。第1のフェイズに入る前に、準備として好子のアセスメントと、絵カードの作成をします。フェイズ1では、座った状態で絵カードを渡して、自分の欲しいものを受け取る。絵カードと自分の欲しいもの、すなわち好子と交換する

ことを教えます。それができるようになったらフェイズ2です。移動して、つまり歩いて行って誰かにカードを渡す。そして要求したものを受け取るということを教えていきます。それからフェイズの3では、絵カードの区別と選択。何枚かの絵カードから自分の使いたいカードを区別して、それを選ぶということを教えます。ここでは選択を教えるということが、非常に大事です。それからフェイズの2で移動してカードを渡すというのも非常に重要なのです。つまりそれができるようになったら、その場に誰もいなくても、誰かを探して、職員室に行ったり、あるいは家だったら台所に行ったりして、誰かを見つけて、その人にカードを渡すことができるようになるのです。これができれば、コミュニケーションとしてはさうとう効果を発揮します。つまり絵カードを、例えば指さすだけのやり方は以前からありましたけれども、指さすだけでは、それを見ている人がいない限りは伝わらないです。だから同じ部屋に人がいても、それを見ていなかったりとか、あるいはその部屋にそもそも誰もいなかったら、いくら絵カードを指さしていても、それは独り言です。コミュニケーションではないです。独り言。だから誰もいなかったら誰かを探して、誰かに手渡すということを、徹底して教えるわけですよ。これが大事。

フェイズの3で絵カードの区別を教えるわけですが、ということは、フェイズの1と2では絵カードの区別ができなくてもいいということなんです。つまり、この絵カードが何を指示しているのかが分からなくても、フェイズの1と2はトレーニングできるんです。絵カードの区別ができない場合には、フェイズ3で教えるんです。フェイズ4で文を教えるんです。カードを2枚使って、「～ください」と文で要求することを教えます。そして、2枚のカードが使えるようになったら、3枚、4枚、5枚という風に文を長くすることを教えていきます。それからフェイズの5では、「何が欲しい？」と質問をして、答えるということを教えるんです。つまり1から4までは全部自発的な要求を教えているんです。自分からの要求を教える。フェイズ5で初めて応答の要求を教えるんです。聞かれて答える。自発的な要求のほうが難しいですから、1から4まででしっかり自発的な要求が出せるようになったら、応答の要求は簡単です。ここで応答を教えるのは次の最後のフェイズ6に繋ぐためなんです。フェイズ6は難しいコメントを教えます。難しいというか意欲があまり高まらないコメントを教えるのですが、最初は応答のコメントです。質問に答えてもらう。何が見えますかとか、何が聞こえますかとかです。今日の天気はなんですかとか、あなたの誕生日は何月何日ですかとか、そういうコメントというのはいろんなものがありますから、そういうものを、まずは質問に答えてもらうことで、教えていって、そして最後は自発的なコメント、自分から伝えたいことを伝えられるようにするのです。

準備として好子アセスメントをします。好子というのは、行動分析学の専門用語ですが、学問的な定義をいうと分かりにくいかもしれないので、とりあえずは子どもが要求したくなるものとか、要求したくなることです。好きな食べ物、好きな飲み物、好きなおもちゃとか好きな活動とかです。自閉症スペクトラムの子どもが何かこだわりのものを持っている、例えば紐をひらひらさせることに没頭しているという場合、紐はすごく強力な好子になるんです。この子にはどんな好子が考えられるかということを検討するのが好子アセスメントです。それから、新しいものをいろいろ試してみて、あ、この子はこういうものが好きなんだ、と確認すること

が好子アセスメントです。これをまずやっておかないとトレーニングに何をを使うか決まらないわけです。フェイズの1というのは、座った状態で、つまり移動しないで絵カードを渡して好子を受け取るわけですが、フェイズの1と2は大人が2人必要です。別に大人じゃなくてもいいんですけどね。お兄ちゃん、お姉ちゃんでもいいわけですけども。トレーニングするトレーナーとしては2人必要なんです。この2人必要というところが決定的に重要で、PECSが登場するまで自発的なコミュニケーションに最初から取り組めなかったのは、トレーナーが1人だったからなんです。トレーナー1人で子ども1人とかね、トレーナー1人で子どもが複数とか、そういうセッティングでやるので、自発的なコミュニケーションを教えることができなかったわけです。スライドのような配置になるのですが、子どもと向かい合ってコミュニケーションのトレーニングのやりとりをするのは、コミュニケーション・パートナーという人なんです。子どもの後ろか横にいて、子どもの手助けをするのがプロンプターという人で、プロンプトという手助けをする人なんです。プロンプトも、言葉や指さしではなくて、手を添えるプロンプト、身体的プロンプトを使います。ですからプロンプターは、言葉を一切かけないのです。手を添えて手伝うだけ。それだけです。全く黒子役のようですね。コミュニケーション・パートナーの人は、子どもの前に好子のカードを置いて、その好子を、さりげなく見せるわけです。黙って。ここで口をきくと、あと応答になってしまうので、黙ってさりげなく見せる。そうすると子どもは、それ好きなものですからね、手を伸ばして取ろうとするのです。この手を伸ばすというのが、自発的な行為なんです。でもこれはまだコミュニケーション行為ではないです。好きなものが目の前に出てきたのでそれを取ろうとただけですから。自発的な行為だけでもコミュニケーション行為ではない。でもそれを自発的なコミュニケーション行為に変えることができます。その役目がプロンプターなんです。つまり子どもがちょっとでも手を伸ばし始めたら、つまり自発的な動きをちょっとでも見せたら、すかさずプロンプターが子どもの手を取って、絵カード持って、その絵カードをコミュニケーション・パートナーの手の中に入れるというこまで手伝うわけです。コミュニケーション・パートナーは、あくまで手の中に絵カードが入ってくるまで待っています。自分から受け取りにいったりはだめです。最後まで、子どもが手の中に入れるということをやってもらう。これを繰り返すわけです。繰り返すうちに最後までプロンプターが手を添えなくても、例えば10センチ手前ぐらいで、もう手を放しても、子どもは絵カード渡せるんです。そしたら次は20センチぐらい手前で、手を放してみると、出来た。次は30センチ手前、もしできなかったら、前の20センチのところまで手助けするということに戻るわけですが、そうやって少しずつ最後から手助けをやめていくと、最終的には子どもは、プロンプトが全然なくても目の前に好子がでてきたら絵カードをとって渡す、そして好子を受け取るということが一人でできるようになるんです。これがフェイズ1です。

最初に全く初めてやったときの場面をお見せしますが、コミュニケーション・パートナーはお母さんにやってもらっていますが、このときはお母さんに説明するの忘れていたんです。カード受け取ったら、すぐに言葉をかけるんです。それまでは黙ってるんですけど、カードを受けとった瞬間に言葉をかける。これが、なんと言いますか、PECSでは対人的好子と呼んでいるのですが、ソーシャルな好子なんです。それに続けて、すぐに好子を渡すんですが、好

子というのは、たいてい物的な好子なんです。とにかく、絵カードを受け取ったら、そこから言葉掛けを始めて、出来るだけ早く好子を渡すということです。この子の好子は味付け海苔です。この場面は子どもが味付け海苔を直接取ろうとしたら、すかさずその手を取って、味付け海苔のカードを持たせて、お母さんに渡すということをしてるんです。今の場面は全く初めての回なので、最後までプロンプトしていますが、そのうち少しずつ最後からプロンプトをやめていくわけです。自力でカードを渡せるようになれば、次のフェイズ2に移って、距離をあけていくのですが、まずカードを受け取るコミュニケーション・パートナーが、少しずつ子どもとの距離をあけていって、座った状態ではカードを渡せない、歩いて渡しに行かなければいけないということを教えていきます。もう一つは絵カードを置いておく場所を、少しずつ子どもから離していって、絵カードを取りに歩いていかないといけないという風にします。

移動が自力でできれば、例えばその部屋に誰もいなくてもちゃんと部屋の外に出て、誰かを見つけて渡すということができれば、絵カードの区別と選択のフェイズ3に移ります。最初は2枚のカードの区別から教えていきますが、この絵カードの区別というのは子どもによってはなかなか難しかったりするので、PECSではいろんなテクニックを開発しています。区別しやすくする工夫が、いろいろ用意されています。そしてここからは、トレーナーは1人でいいんです。絵カードがある程度区別ができるようになれば、今度は文を作るフェイズ4に入るのです。それにはこういう文カードというものを使います。PECSのコミュニケーションブックは、裏表紙面積がちょっと広いのです。広い部分に短冊状の文カードというものが貼ってあります。マジックテープで貼ってあります。文カードの上にもマジックテープが貼ってあって、そこに絵カードを貼るのです。最初は「ください」というカードは文カードの上に貼っておいて、好子のカードを1枚だけ表紙に貼っておきます。フェイズ3まで済んでいる子どもですから、これ1枚を取って渡そうとするわけです。だからその手を取って、好子のカードをこの文カードに貼らせて、この文カードを外して渡すということを教えます。それができるようになると、「ください」のカードも外しておいて、2枚のカードを文カードに貼って渡すことを教えるのです。その時にその文カードを受け取った人は、子どものほうに絵カードを向けて、指さしながら読み上げるのです。「～ください」と読み上げていく。そのうち子どもに指さしを教えます。子どもが指さすのに応じて「～ください」と読み上げていくのです。これをやっているうちに、このフェイズ4の途中で、言葉がしゃべれなかった子どもが言葉をしゃべれるようになったり、発声が増えたりすることがよくあります。同じ言い方を誰が受け取ってもすることになります。絵カードに書かれた文字を読むだけです。いろんなバリエーションで言葉を返したりしないので、たぶん早く言葉をしゃべれるようになる子どもが出てくるのだらうと思いますが、まだそのあたりの研究はないです。

2語文が作れたら、3語文、4語文という風に文を長くしていくために属性を教えます。大きさを指定したり、数を指定したり、色を指定したり。

これは写真だけですが、3歳8か月の時からPECSをやっていた子どもです。たまたま療育施設を覗いた時にその子が、遊んでいたんです。トレーニングではなくて、遊んでる場面で自分でおもちゃを要求していたのですが、このように6枚のカードを貼って、「緑」と「青」と「赤」の「車」「3個」「ください」という文にして保育士さんに渡していたのです。でも

彼はまだしゃべれないのです。言葉では伝えられないけども、このPECSだったらこんなに複雑な要求が伝えられるのです。だから頭の中にはこういう要求ができるだけの言葉を持っているけれども、それが口からは出てこない。次のフェイズの5は、応答の要求を教えるのですが、これは簡単です。最後のフェイズ6でコメントを教えるわけです。最初は応答のコメントで「何が見えるの?」とか「何が聞こえるの?」などの質問に答えてもらい、

PECSの中心的なトレーニングは、フェイズ1からフェイズ6ですが、それをやっていく途中で、理解コミュニケーション、それから表出コミュニケーションに関して、他にもいろんなことを教えていきます。手助けもですね、特別なカード「手伝って」というカードを作って、それを渡して何か自分一人ではできないときに手伝ってもらおうとか、あるいは2語文がもうできている子だったら、「手伝って」「ください」という2語文にするとか。もっと進むと「～さん」「手伝って」「ください」とか「～を」「手伝って」「ください」と長くしていくこともできます。

休憩も絵は作れないので、文字にして、休憩を取りたくなるような場面で教えるのですが、休憩は、同じカードを何枚か用意して一定の時間帯の内に何回休憩要求できるかを教えることができるわけです。例えば午前中に休憩3回要求してもいいですよ。1枚渡したらこれは戻さないで、だんだん減っていくわけです。あと2回、あと1回できるというふうにね。

PECSは言葉の代わりですから、代替拡大コミュニケーションですから、言葉で不自由していない子どもだったら、言葉でコミュニケーションを取っているような場面では、どこでもPECSが使えないとおかしいわけです。トレーニング場面でしか使えないというのは、全く本末転倒ですから、普段の生活の中で言葉の代わりとしてあたり前に使えないといけません。だから家の中でも、学校でも、そして地域社会でもPECSを使っていかないとはいけません。

ところで、よく出る質問なんですけど、カードで要求してきたらいつでも叶えないといけないのかという問題です。これは、言葉で要求してきたらいつでも叶えなきゃいけないのかということと同じで、そんなことないですよ。言葉で要求してきても叶えられないときがある。そもそも要求されたものがない場合もあるし、あるいは今すぐはだめという場合もありますよね。だから待ってもらおうということも教える必要があります。さっきちょっと紹介しました。「ない」ということを伝えるにはいろいろな方法があります。一つは回数制限して行って、最終的にはありませんよとしちゃうとか、代替りのもので我慢してもらおうとか、それから今すぐはちょっと無理なので待ってもらわなきゃいけないとかですね。それからまあこれをやってからにしてとかね。いくつか課題をやってからにして、お手伝いをしてからにして、という風に交渉するとかですね。手に入るのはこの時間帯ですよというのをスケジュール示すとかです。ないものは見えないわけですが、空の容器やお皿は見えるわけで、それを見せて「もう、カラ。ないよ」と伝えるとかですね。それからカードにNOのサインを貼るとというのが非常に有効な方法というか、優れた方法ですね。このNOサインが貼ってあるカードは、持ってきてもありませんよということ伝えるんです。PECSを日本で普及させてる会社がピラミッド教育コンサルタント・オブ・ジャパンなんですけど、このNOサインのシールを通信販売しています。ラミネートしたカードに貼れるんです。そして、何度もはがしてはまた使えるというシールな

のです。これを使うのが非常に優れた方法です。やってはいけないことは、カードを隠してしまうということです。これを要求してきても今日は渡せないの、カードそのものを隠すというのはよくない。それは言葉のある子どもに、ガムテープで口を塞ぐようなものですから。それよりも、これは今日は手に入らないということが分かるような手がかりをカードそのものに付けてあげるといことが大事です。ユニバーサルNOサイン。

PECSのいい点ですが、特徴は最初から自発的なコミュニケーションを教えるということです。それから、子どもにとって実用的なコミュニケーション・スキルを教えることを目指している。子どもにとってプラスの結果が返ってくる要求ということからトレーニングしていく。だから意欲が低下しない。それからプロンプターがついて、必ず絵カードを相手に渡して、好子が手に入るということをするので、エラーが出ないわけです。好子がもらえないということがないわけです。トレーニングの時も。だから意欲が低下しない。さらに最初から般化を組み込みます。般化というのは、例えば味付け海苔しか要求できないということでは困るわけで、好子をいろんなものに取り換えてトレーニングしていきます。それからお母さんにしかカードを渡せないというのでは困るわけですから、人も変えて練習します。いろんな人に渡せるように。それからこの部屋でしか渡せないというのではだめですから、いろんな場所で練習するという、まあそういう好子と人と場所の般化というのは最初から組み込むんです。それから、なんといっても相手の手の中にカードを入れる、ということを経験してやっていくので、人を意識するようになるんです。子どもによっては目もよく合うようになります。とにかく人を意識して人に渡すということを経験できます。最初はカードと好子との交換だけを教えるので、カードの区別ができなくてもいい。だから非常に早い時期から始められますし、非常に障害が重い人でも始めることができます。

自発を最初から重要視して、プロンプトを出来るだけはやくやめていくので、プロンプト依存、指示待ちにならないですむ、ということですね。PECSで自発的なコミュニケーションが取れるようになれば、いわゆる問題行動というものも減っていくか、あるいはなくなるということもよくありますし、言葉の発達もフェイズ4の文に入ってから促されることもよくあります。

最後に、最近はやりのICT機器。スマートフォンとかパソコンとか、アイパッドのようなタブレットで絵や写真を並べて、そして読み上げ機能もあって音声を出すということが簡単にできるようになりました。ちょっと前までは、そういう音声発生装置というのはすごく高かったのですが、最近ではスマートフォンとかタブレット端末で使えるようになりました。ただ、あまり簡単にそれに乗り移らないほうがいい。というのは、ちゃんと相手に伝えるということができないと意味がないわけです。自分の手元だけで絵を並べて、「～ください」という音声を出していても、誰も聞いていなかったら全然伝わらないわけですから。やはりそれを持って誰かのところに行って、そこで読み上げるということができないと、コミュニケーションの道具としてはあまり有用性がない。だから最初にPECSのトレーニングをしておいて、人にカードを渡すということをしつかり身に付けてから、こういう機械に移れば、確実に伝えることができるようになります。そしてまずPECSをやっておいて、PECSはいつでも使えるような状態にしておくと、機器がバッテリー切れとか故障したときにも、即PECSに戻ることが

できるので、コミュニケーションが途切れるという事態にはならなくてすむのです。

PECSを今、日本で普及させているのはピラミッド教育コンサルタントオブジャパンという会社で、この会場がある同じ小倉北区にあります。ホームページをご覧になったら、全国でいろんなところでワークショップが開かれているのがわかります。初級コースは丸二日間のワークショップなのです。今日の私のお話は、ほんの短時間でPECSを紹介しただけですから、間違っても今日PECSのトレーニングを受けましたなんて言わないでください。それはワークショップに出てから言ってください。

自閉症スペクトラムの人に視覚的支援が必要であることを知らなくて実行しないのはネグレクトであり、心理的虐待であると思いますが、知っているのに実行しないのはもっとたちが悪い。不作為犯だと私は思っております。そう言われる時代がもうそこまで来ています。国連の障害者の権利条約が、もうすぐ批准されるはずですが、批准されたら、拡大代替コミュニケーションを選択できるようにしなければならぬとはっきり書いてあるんです。そういうことが必要な人にそれをしないのは、差別であるとはっきり書いてあるわけです。ですからコミュニケーションを、こちらからだけではなくて、本人からも取れるようにするという支援を忘れないうようにしていただきたいと思います。



自閉症児者の明日に向けて  
～ 支援の最前線 ～

九州自閉症協議会  
第20回大会 in 福岡

■開催日時 \_\_\_\_\_

2013年9月14日(土)13:00  
～ 9月15日(日)12:00

■会場 \_\_\_\_\_

北九州国際会議場  
メインホール

主催 九州自閉症協議会・福岡県自閉症協会

# 九州自閉症協議会第20回大会 in 福岡プログラム

## I 目的

---

(社法)日本自閉症協会に所属する九州・沖縄各県自閉症協会の協議体である九州自閉症協議会が主催する、各県自閉症協会会員及び一般市民を対象とした、自閉症に対する理解を深め、当事者たちの支援体制の充実に向けての啓発・研修大会(講演会及びパネルディスカッション)の開催。

## II 内容

---

### 9月14日(土)

12:00～ 受付開始

13:00～13:30 開会式(メインホール)

主催者開会宣言、主催地首長挨拶、主賓祝辞

13:30～15:00 基調講演①(メインホール)

門眞一郎先生(京都市児童福祉センター副院長)

演題:幼児期・学齢期の自閉症児に対する支援の基本

15:30～17:00 基調講演②(メインホール)

梅永雄二先生(宇都宮大学教育学部特別支援教育専攻教授)

演題:高機能ASDの人の就労支援

～ライフスキルを中心に～

17:00～20:00 懇親会(イベントホール)

### 9月15日(日)

9:30～11:30

パネルディスカッション(メインホール)

テーマ:自閉症児者の明日に向けて～支援の最前線～

パネリスト

山崎晃資先生(日本自閉症協会会長)

河野義恭先生(北九州市立総合療育センター副所長)

納富恵子先生(福岡教育大学大学院教育学研究科教授)